遠かなる風雪 ⑥

実録・柴田音吉洋服店

徒弟制度の中で——見所ある〝タコ〟

「あのタコ、見所あるぞ、面がまえがいい」。

タコといわれた治三郎少年は、それでも嬉しかった。暖かい視線を感じながら、思い切り頬をふくらまし、フイゴを吹く、炭火が一段と赤くなり、灰かぐらがザン切り頭に舞い落ちる。

神戸一の、いや関西一という人もある柴田の店のあるじから、見所あるとほめられたこの一瞬から、治三郎少年と柴田の店との深いえにしが始まっていた。

× ×

田中治三郎少年の父は、東北の貿易商だった。欧州をまわって帰ってきた日、16才の息子を前にして、父はいった。

「お前、洋服屋になれ」。

治三郎少年は、大阪横堀2丁目の、豊田善吉洋服店に〝ぼうず〟として住込む。明治38年であった。

木綿のゴツゴツした〝アッシ〟に革バンド、冬でもパッチもはかず、朝早くから炭火を吹く日が続いた。

アイロンをほど良い温度に熱するこの仕事が、徒弟の第一課である。

徒弟の仕事はきびしい。それでも1日、15日には休みがある。11月3日の〝天長節〟と7月の夏祭りも休みだった。

一般の商家は休みなしのところが多かった。だから洋服屋の徒弟はまだ恵まれているのだと、治三郎少年は考える。

現在の田中治三郎さん

道頓堀の活動写真館に、母の仕送りの一張らの着物を着て入る。20銭の月給のうち、8銭が消える。正月にはこの木戸銭が10銭になった。

出雲屋の川うなぎの〝まむし丼〟も、8銭だった。財布をにぎりしめた徒弟たちの、舌にしみわたる味わいだった。

一人前になった職人は、工賃を仕立物単位で受取る。

チョッキが20銭、ズボンが35銭、上着が70銭というのが相場である。

ウドン1銭、銭湯が文字通り1銭の時代に、背広の上代は17円から18円。月給取りは若い人で10円、30円の給料をとるということは、給料生活者の〝理想〟である

そんな時代に、柴田の洋服は30円もした。高いもので40円を越える。柴田音吉洋服店は、治三郎少年のそして徒弟たちの憧れであった。

× ×

〝音吉はん〟に認められた治三郎少年は、店の用事でしばしば神戸の店を訪れるようになった。

治三郎少年のつとめていた豊田の店では、高津の製造元から芯地の馬巣（バス）を買っていた。

〝音吉はん〟は、豊田からこれを仕入れていたが、その後多くの店が出来ても、他に仕入先を替えるということをしなかった。〝人情の厚い人や、豊田の主人は〟口ぐせのようにそういって感謝する。

神戸元町の柴田を訪れる治三郎少年はいつも店の大きなフランス製の金庫と、その上の額を目にして溜息をついた。

「すばらしい金庫や。それにもまして、すばらしい額やなあ……」。

長方形の額には墨痕したたる文字でこう書かれてあった。

「初めて御用命のお客様は手付金頂戴候也」。

店のあるじの衿持が読めるような文字である。

2階の裁断室には、3人の裁断師がいた。裁ち台の引出しには、ズボンのひざ裏につける甲斐絹が、キチンと切って、2匹も3匹も揃えて入れてある。「大したものや…」治三郎少年の讃嘆は深まってゆくばかりである。

明治40年、◎柴田音吉洋服店は、元町3丁目の北側に、木造3階建、堂々たる構えの新しい店を建築した。

岡　和子記者

（つづく）

一族に囲まれて—（矢印初代柴田音吉）